

2019-20 年度 夏期コース報告

結城佐織、千田昭予、本間光徳、川西由美子
白石恵利奈、小峰克之、橋本佳子

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下、IUC）では、40 週間の年間コースとは独立して 7 週間の夏期コースが設置されている。2019-20 年度（以下、2020 年）の夏期コースは 2020 年 6 月 18 日（木）より 2020 年 8 月 5 日（水）まで実施した。受講修了者は 28 名¹で、博士課程が 18 名、修士課程が 10 名である。本稿では 2 章で 2020 年の夏期コースの特徴について、3 章で教育活動の特徴について、4 章で個人授業について、5 章で課外活動について、6 章でオンライン授業の問題と工夫について、7 章で受講者による評価について報告する。

2 2020 年の夏期コースの特徴

夏期コースの目標と例年の特徴については、大橋 (2019) を参照されたい。2020 年はオリンピックが開催される予定であったため、当初から例年とは異なるプログラムでの実施を余儀なくされた。更に 2020 年初頭の新型コロナウイルスの影響により、3 月に急遽オンライン授業への変更を検討することになった。

オンライン授業において最初に問題となったのは、教育の質の確保ができるのかということであった²。次に問題となったのは、講師と受講者との時差である。この 2 つの問題を解決するために、①1 クラスを最大 6 人にする、②授業は日本時間の 8 時半開始にし、1 コマ分削減する、③個人授業を設定し、受講者と講師の都合の良い時間に行う（参照：4 章）、④コンタクトアワーの減少に伴い³受講料を減額する、⑤オンライン授業を理由にした辞退者に対しては受験料の返還を行う、という 5 つの対策が取られた。①に関しては関係者間で早期に合意が取れたものの、教育の質、予算、利益、講師の確保などを考慮しながら関係者間で議論を重ね、最終的に受講者が確定したのは夏期コース開始のわずか 1 ヶ月前であった。②と③の時間設定に関しては資料 1 を参照されたい。

また、オンライン授業ということで心配されたのが、受講者同士の交流である。IUC では交流の場として自由会話の場とワークショップの場を設けた（参照：5 章）。

3 教育活動の概要

3-1 では各クラスの報告を行い、3-2 で受講者からのアンケートについて触れる。報告内容はクラス概要、コース目標、時間割、基本教材、クラス授業に対するコメントである。クラス授業については担任が報告を行う。

3-1 クラス授業

3-1-1 夏海

【クラス概要】

担任：本間光徳、副担任：千田昭予

受講者5名：博士課程1名、修士課程4名（大衆文化論1名、経済学1名、言語学1名、日本語教育学1名、文化財保存学1名）

【コース目標】

1. 読む

- ・多様なテーマ・ジャンルの文章が読める。精読・速読ができる。
- ・使用されている語句や表現から、テーマに対する筆者の立場を理解することができる。
- ・表現のかたさややわらかさを理解し、想定される読者を想像することができる。

2. 聞く

- ・ニュースなどが聞き取れ、理解することができる。
- ・間のとり方、イントネーションによる発話者の意図を理解することができる。

3. 話す

- ・発音練習を反復し、より自然な発音を身につける。
- ・学術発表、ビジネスの場などにふさわしい話し方ができる。
- ・相手の質問や意図を理解し、適切な応答ができる。
- ・他者に配慮した発話ができる。

4. 書く

- ・与えられた文章中の語句を用いて内容をまとめることができる。
- ・文章中の語句や使用された文法を用いて作文ができる。
- ・比較的フォーマルなEメールを書くことができる。

5. プレゼンテーション

- ・学術的発表に相応しい語彙・表現を使用し、パワーポイントを用いたプレゼンテーションができる。

表 1 時間割 (夏海)

時間	月	火	水	木	金
8:30- 9:20	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現
9:30- 10:20	読解	ニュース	読解	文法演習	読解
10:30- 11:20	議論 プレゼンテー ション	新聞	議論 プレゼンテー ション	文法演習	議論 プレゼンテー ション

基本教材は、日本研究センター (2020) 『待遇表現』、目黒真実 (2010) 『上級学習者のための日本語読解ワークブック』アルク、庵功雄他 (2019) 『日本語文法演習 上級』スリーエーネットワークである。

【コメント】

センター発行の『待遇表現』を徹底的に使用し全ユニットを学習、コース初日より口頭発表会を意識させ、期間中『待遇表現』の定形表現を積極的に使用させた。毎回1限を「待遇表現」とすることによりコースの一貫性を確保し、テキスト内容の9割程度以上を消化した。奇数人数でのクラスであった為、二人一組のロールプレイではブレイク・アウト機能の使用頻度を抑えた。課題の提出方法もメール添付とし、メール本文は添削指導の対象とした。これにより、コース終了までにクラスの全学習者がメールに使用する「待遇表現」を習得することができた。

2限には「読解」を設定し、各回ごとに完結させた。第3週までに2、3限の授業を本間と千田の分業制へ段階的に移行した。また、全ての課題を課した講師に提出させることにより学習者の授業理解度の掌握を容易にすると共に、講師間の連絡の簡素化を図った。

3限を「議論・プレゼンテーション」とした。即ち、2限で扱った内容に基づき3限で議論をする流れである。その際、1限で学習した表現を意識的に使用させた。更に、学習者には「ニュース」、「新聞」、「文法演習」で習得した知識や文法事項を活用させることを意図した。

中間試験までの前期は、本間が議論点を抽出、関連事項を含めプレゼンテーションを行い議論に移ったが、後半は各回学習者がディスカッションリーダーとして授業をすすめた。この時間に於いても、パワーポイントの使用法を指導すると共に、引用・出典の明示を求めた。口頭発表のパワーポイント・スライドは、時間の都合上完成まで指導できた訳ではなく、事前に未完成のものを1回見ただけというものもあった。しかし、引用・出典の明示に関する限り、口頭発表会に於いて遺漏は無かった。

(文責：本間光徳)

3-1-2 夏草

【クラス概要】

担任：川西由美子、副担任：後藤恵利

受講者6名：博士課程2名、修士課程4名、（日本文学1名、法学1名、アジア研究と政治科学1名、東アジア研究1名、日本史1名、日本研究1名）

【コース目標】

0. 総合面：

- ・具体的、及び、抽象的な観点で情報を把握し、表現することができる。
- ・話題や論点などに一貫性を持たせることができる。

1. 読む：

- ・多様なテーマ・ジャンルの文章が読める。精読・速読ができる。
- ・裏付けのある意見、仮説、文化に関わる表現や文化的な前提を理解することができる。
- ・構成を意識し、次の展開を予測しながら読むことができる。

2. 聞く：

- ・ニュースなどが聞き取れ、理解することができる。
- ・日常的なやり取りやディスカッションで相手のニーズ・要点などを聞き取ることができる。
- ・発音・イントネーションなどを聞き取り、活かすことができる。

3. 話す：

- ・時と場合に合わせて機能的に適切な表現、相互作用・談話管理（発言権の適切な取得や裏付け部分と主要論点の区別をつけるなど）のストラテジーを使うことができる。
- ・自分の経験を簡潔に雑談形式で始めて、一定の長さ続けて、終えることができる。
- ・相手の意見をまとめつつ、自分の意見を簡潔に述べるができる。
- ・適切に問題提起ができる。叙述・描写をすることができる。

4. 書く：

- ・正確さと詳しさを持って幅広い話題について書くことができる。
- ・適切な文法や表現を使い、わかりやすくまとめて書ける。構合力と議論の掘り下げ（因果関係、比較、時系列など）により論点間の関係が一貫した文を明瞭に書くことができる。
- ・適切な文章形式にしたがってフォーマルな通信文が書くことができる。

表 2 時間割 (夏草)

時間	月	火	水	木	金
8:30- 9:20	出来レポ ニュース報告 速読描写 待遇表現	出来レポ スピーチ ニュース報告 速読描写 待遇表現	出来レポ スピーチ ニュース報告 速読描写 待遇表現	出来レポ スピーチ ニュース報告 速読描写 待遇表現	出来レポ 待遇表現まとめ
9:30- 10:20	表現クイズ 読解	表現クイズ 読解	表現クイズ 読解	表現クイズ 読解	読解 まとめのディス カッション
10:30- 11:20	文法 発話練習	ディスカッ ション	文法 発話練習	ディスカッ ション	語彙・文法まとめ 文を豊かにする

基本教材は、近藤安月子他著 (2005) 上級日本語教科書『文化へのまなざし』東京大学 AIKOM 日本語プログラム、川端祐一郎他著 (2019)『上級日本語教材 日本がわかる、日本語がわかる ベストセラーの書評エッセイ 24』凡人社である。

【コメント】

今年の特徴は他 2 クラスとの合同授業を 3 時間 (夏柳とは 1 時間、夏海とは 2 時間) 行うことができた点である。担任の先生の協力により受講者にも良い刺激になり有意義だった。興味、ニーズ、タイミングが合えばオススメ。夏柳とのほうは思ったより活発な議論とはならなかったので夏海との合同授業までに活発な議論になるように授業で準備したのが功を奏し、皆意見を述べられた。夏草の受講者に合同授業で学んだことを書かせたところ、有意義であった、夏海の受講者が自信をもって発言していたので刺激になったとのことだった。

例年、受講者に選択させる読み物 (文藝春秋オピニオンの 2019 年の論点 100 など) の時間があったが今回は合同授業のため割愛した。

例年の 4 時間が 3 時間になったことを補うための個人教授の時間は、普段全体の前では注意・練習しにくく授業外に教えていた発音など個人の問題に向き合うことができ大変有意義であった。この時間に初めて自分の問題点を理解し意識できるようになったということが複数の学生に複数回見られた。遠隔であったので音声に集中できたことも要因かと考えられる。対面に戻っても個人授業の時間は論文読解などではなく発音や文法など個人の癖を直す基本能力アップの時間を設けられたらと思う。対面では待たせている受講者への配慮から「もうひと押し」できないのが、遠慮なくできるという利点があった。受講者からも好評であった。

今回は遠隔授業ということで最初はコミュニティー形成に効果的な自己開示のできるスピーチを行った。各受講者の性格のせいかわ発話数が増えないようだったので 2 巡後に速

読+描写の活動に切り替えた。教材は「54字の物語」で短時間で内容を理解し互いに説明しあう活動をした。チェーンストーリーも採用した。

ニュース報告も著作権の関係で全員が同じ番組を見ていないので補足ができず、やり方を考えなくてはならない。見せたい録画をクラスのフォルダーに移動し短期間視聴させた後、消去するのは煩雑だが、講師がするのではなく教材助手に頼むのも手かと思う。

文法の時間は前半は読解授業で扱った読み物に出てくる文法項目を取り上げ、後半は受講者のニーズに合わせてセンターの「文法ノート」と「ステップアップ」を使いながら行った。

待遇表現は、補足説明（先生のセリフはそのまま受講者としては使えないなど）をしながら使った。金曜のまとめの時間は基本練習でさらに練習が必要なもの、応用練習などをした。「あ、先生」「え+質問」などを定型表現として強調して練習した。

読み物のテーマは、専門に関係なく自分の生活に関するもの、それまでの読み物に関連したものを選んだが、「専門ではないので興味がない」と言う受講者が15年教えていて初めていて驚いた。その発言により、すでに決定していたその受講生の担当を他の受講生と交代した。

金曜3限は6週のうち、1回は祝日で、2回は時間割通りに行い、残りの3回は、それぞれ中間試験、夏柳と合同授業、卒業発表リハの時間に充てた。遠隔が初めてだったのであえて柔軟に使える時間にしておいた。

夏草の受講者のみに行ったアンケートから分かったことは、クラスメートと親しくなれるようにZoomで授業時間中に自由会話の時間があつたらよかったということである。それを出来レポという「毎日の出来事を雑談形式で1分以内に話す」などの活動で狙ったが、まとまった時間がほしかったとのことであった。前期にクラス内交流の時間を持ったつもりであったが、話題提供を狙うも盛り上がらなかったなので、そこを思い切って完全に自由にしてもよかった。

(文責：川西由美子)

3-1-3 夏柳

【クラス概要】

担任：白石恵利奈、副担任：城佳子

受講者6名：博士課程5名、修士課程1名（美術史2名、文学1名、歴史1名、東アジア研究1名、東アジア研究1名）

【コース目標】

1. 読む

- ・専門的な文章を読む際、自分の知識と関連付けてより深く理解することができる。

- ・文章の構成を意識しながら読むことができる。
 - ・次の展開を予測しながら読むことができる。
2. 聞く
- ・ニュースの大まかな内容を理解することができる。
 - ・ネイティブの発音・イントネーションを自分の発音・イントネーションと照らし合わせながら聞き、違うところは修正することができる。
3. 話す
- ・要点を意識して、簡潔に伝えることができる。
 - ・自分の専門分野の話を専門外の人にもわかりやすく話すことができる。
 - ・自分の話し方の癖に気付き、必要であれば直すことができる。
4. 書く
- ・日本についての知識を増やし、
 - ・的確な文法、接続詞、語彙を使い、よりフォーマルな文章を書くことができる。

表 3 時間割 (夏柳) 1-4 週目

時間	月	火	水	木	金
8:30-9:25	スピーチ ニュース報告 待遇表現	スピーチ ニュース報告 待遇表現	スピーチ ニュース報告 待遇表現	スピーチ ニュース報告 待遇表現	スピーチ 待遇表現 (月 ～木の復習)
9:35-10:45	単語・漢字 クイズ 読み物	単語・漢字 クイズ 読み物	単語・漢字 クイズ 読み物	単語・漢字 クイズ 読み物	ディスカッション
10:55-11:20	文法	文法	文法	文法	ニュース報告 の分析

表4 時間割(夏柳)5-6週目

時間	月	火	水	木	金
8:30- 9:25	スピーチ ニュース報告 待遇表現	スピーチ ニュース報告 待遇表現	スピーチ ニュース報告 待遇表現	スピーチ ニュース報告 待遇表現	発表会 リハーサル
9:35- 10:45	読み物 (受講者が 選んだもの)	読み物 (受講者が 選んだもの)	読み物 (受講者が 選んだもの)	読み物 (受講者が 選んだもの)	発表会 リハーサル
10:55- 11:20	ディスカッシ ョン	ディスカッシ ョン	ディスカッシ ョン	ディスカッシ ョン	クラス 交流会

※金曜は最終日のみ

基本教材は、許明子・宮崎恵子(2013)『レベルアップ日本語文法 中級』くろしお出版である。

【コメント】

オンライン授業では、間違いを暗示的に示すことが難しく、結果として明示的にフィードバックすることが多くなった。そのフィードバックを受け、受講者がそれぞれ自分の課題を見つけ、コースを通してその課題に取り組んでいたことは印象深い。受講者の課題には、授業で勉強した語彙や文法を使うこと、指摘された発音を直すこと、日本語らしくないフィラーを使用しないこと、文末表現に気を付けること等があった。これらの課題を達成したことに対して受講者同士で褒め合う様子も見られた。

夏柳では、待遇表現のロールプレイを授業時間外に毎回違うペアで練習させた。これが他の受講者との関係を構築する良い機会になったのではないかと思う。試験の前には受講者同士で声を掛け合って一緒に試験勉強をしたり、発表会の原稿を一緒に直したり、授業時間外でも受講者同士で学びを深める様子も窺えた。また、5-6週目に授業で扱う読み物を選ぶ際も自分が読みたいものではなく、他の受講者の専門や趣味を意識して全員が楽しめるものという観点から選んでいたことも受講者同士の人間関係があったからこそだと感じている。読み物の内容は、論文、古事記、小説、コラム等選んだものは様々であったが、いずれも好評で大いに盛り上がった。

このように受講者が主体的に学び、お互いを尊重し合う雰囲気があったからこそ、オンラインという特殊な環境下においても受講者がモチベーションを維持することができたのではないかと思う。

(文責：白石恵利奈)

3-1-4 夏山

【クラス概要】

担任：小峰克之 副担任：石川晶子

受講者6名 博士課程5名 修士課程1名（宗教学3名、歴史学1名、文学1名、映像理論1名）

【コース目標】

0. 総合面

- ・習得した学習事項を相互に関連づけ、日本語を正しく運用できる。
- ・フォーマルな場も含めて日本語でのコミュニケーションを円滑に行うことができる。

1. 読む

- ・文章の主題をしっかりと理解できる。
- ・構文上やや複雑な文章も論理構成を捉えてしっかりと理解できる。
- ・表現のニュアンスを汲み取ったり、表現の背後にある文化的な要素を推し量ったりすることができる。
- ・語彙や語法、構文などを読むことを通じて吸収し、自分の表現に活かすことができる。

2. 聞く

- ・談話やニュースなど一定の速さをもつものでも聞き取ることができる。
- ・ディスカッションで他者の発言の意図を理解することができる。
- ・発音やイントネーションを意識して聞き、それを適宜自身の発話に活用することができる。

3. 話す

- ・出来事や状況をしっかりと描写し、それを的確に伝えることができる。
- ・出来事の展開や前後関係を論理的構成によって一連の談話として伝えることができる。
- ・モノローグに陥らず、他者の発話に合わせてたり他者の反応を確認したりしながら自身の発話をコントロールし、談話を展開していくことができる。

4. 書く

- ・基本的な文法や語法を間違えずにしっかりと使い、的確に表現できる。
- ・カジュアルな日本語ではなく、しっかりとした書き言葉を意識することができる。
- ・一般的な話題について自身の考えを表現できる。また、自分の専門分野については、専門用語などを使い論理的に表現できる。

表 5 時間割 (夏山)

時間	月	火	水	木	金
8:30- 9:20	スピーチ 文法	スピーチ 文法	スピーチ 文法	スピーチ 文法	スピーチ 文法
9:30- 10:40	単語クイズ 読解・議論	単語クイズ 読解・議論	単語クイズ 読解・議論	単語クイズ 読解・議論	単語クイズ 読解・議論
10:50- 11:20	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現

基本教材は、日本研究センター教材『サマープログラム文法ノート』、日本研究センター教材『待遇表現』、読解は日本研究センターの年間コースの教材などを活用した自主作成教材である。

【コメント】

従来夏山クラスは日本語レベルとしては6クラス中4番目のクラスであったが、今回は5クラス編成の4番目ということで教材を用意する際にはその点を考慮して準備した。しかし、実際に配属された受講者の日本語レベルは想定したものよりも若干低かった。それが顕著に表れたのが読解の授業で、文章の全体像はある程度イメージできるものの、文章のニュアンスが汲み取れず筆者の立ち位置を見誤ったり、誰が誰にとという部分を勘違いしたりなど、細部に於いては正確に文意を捉えられていないということが授業を進めていくうちに明らかとなった。そこで、読解では当初予定していた読み物をいくつかカットし、一つの文章に掛ける時間を長くすることで対応した。

受講者のオーラルの能力についてはクラス内でレベルの差があり、発音やアクセントにかなり問題があったり、文節単位でポーズをとるため流暢さに欠けたりする受講者がいた。対面授業であれば放課後や休み時間にも日本語を使わなければならないが、その中で受講者が講師の指導を意識して徐々に上手くなっていくということがみられるのだが、今年度はすべてオンラインであるため受講者一人一人の発話量が減っており、何らかの対策が必要であった。そこで、特にコースの前半では受講者に録音の宿題を度々課し、場合によっては採点やアドバイスも録音で返すなどの方法を試みた。発話の機会が劇的に増えたとは言えないが、受講者への意識付けという点では効果があったように思う。

今回のカリキュラムの中で他にオンラインあるいは時差の影響があったのは、日々の単語クイズである。従来は午前、午後ともクラス内で完結するカリキュラムであったが、今回は授業後に個別指導などがあり、そのため授業の延長は控える必要があった。そこで、実質的な授業時間の確保のため昨年まで授業時間内で行っていた単語クイズを授業時間外とした。しかし、そのために講師の監督が行き届かず提出が遅れるということがしばしば見られた。折衷案として授業の最後に問題を渡し提出したものから退出という方法も考えたが、授業後の個別指導などのことを考えるとその方法もとりにくく、結局受講者に遅れ

ないように注意するしかなかった。なお、単語クイズは解答を手書きした上で写真を撮らせその画像を送らせるという形を取ったが、画像の採点は手間が掛かり講師としてもやりづらい面があった。ただ、コースの終わり近くでペンタブレットを使って採点するようにしてからはその点は改善された。

このほか授業に関する事として、教材のテキストファイル化について触れておきたい。今回読解の教材はすべて PDF 版とテキストファイル版を用意した。これはもともと講師側で単語リストなどを用意するのではなく、受講者自身に調べさせるという目的で用意したものであったが、それ以外にも用途があり有益であった。受講者は必ずしも教材をすぐに印刷できる環境がなく、そういった場合、受講者はパソコンでズーム、テキスト、クラスノートと最低でも三つのウィンドウを見なければならない。この時、教材がテキストファイルであれば、それをクラスノートに張り付けウィンドウを二つに減らすことができる。このことに気が付いたのはコースの終わり近くであったのだが、実際にテキストをクラスノートに張ってみると授業で指示を出しやすく大変便利であった。教材のテキストファイル化にはこのような利点があり、今後オンライン授業をする上で準備しておくべきことのように思う。

最後に授業とは別にクラスの様子についてであるが、やはりオンラインということによって従来と比べて受講者同士が打ち解けるのに時間が掛った。また、今回は校外学習がなく授業に集中できた反面気分転換になるような行事がなく、受講者が疲れてきた後半にその必要性を感じた。今回はたまたま日程の関係で4連休がありそこで受講者たちはリフレッシュできたようだが、今後オンラインのみでコースを実施する場合、行事の導入やその実施方法について一考の余地があるように思う。

(文責：小峰克之)

3-1-5 夏鳥

【クラス概要】

担任：橋本佳子、副担任：高橋佳奈子

受講者5名：博士課程5名（文化人類学1名、考古学1名、宗教学1名、中国語1名、日本美術史1名）

【コース目標】

1. 読む

- ・読み物に書いてあることや筆者の意図を正しく理解できるようになる。
- ・論理的文章の構成を知り、学術論文を読むための基礎となる表現や文型を学ぶ。

2. 聞く：

- ・ニュースや発表などを聞き取り、理解することができる。
- ・日常的なやり取りやディスカッションで相手のニーズや要点などを聞き取ることができ

る。

3. 話す：

- ・人間関係や場面・内容に合った話し方ができるようになる。
- ・自分の経験を簡潔に雑談形式で話すことができる。
- ・聴き取ったこと、読み取ったことをまとめて話し、意見を述べるができる。

4. 書く：

- ・日常の描写から専門的な説明まで、適切な語彙や表現を使い分かりやすくまとめることができる。
- ・内容や用途にふさわしい文体で適切な文法や文型が使える。

表 6 時間割 (夏鳥)

時間	月	火	水	木	金
8:30- 9:30	文法 待遇表現	文法 待遇表現	文法 待遇表現	文法 待遇表現	文法復習 待遇表現復習
9:40- 10:30	語彙クイズ 読解	語彙クイズ 読解	語彙クイズ 聴解・発表	語彙クイズ 読解	読解復習
10:40- 11:20	ニュース 会話	ニュース 会話	ニュース 会話	ニュース 会話	動画 会話

基本教材は、友松悦子・和栗雅子著 (2004)『初級日本語文法総まとめポイント 20』スリーエーネットワーク、アカデミック・ジャパニーズ編著 (2001)『留学生の日本語 読解編』アルク、平井悦子・三輪さち子著 (2009)『中級を学ぼう』スリーエーネットワークである。

【コメント】

専門の研究に日本語が必要な受講者ばかりで、非常に意欲的でまじめなクラスだった。宿題提出はほぼ 100%で毎日の語彙クイズや文法問題の正答率も高かった。一方で、日本語を目で学んできており相対的に話す力が弱い、日本語に触れた経験が少なく語彙や表現に限られている、という点が弱点として挙げられた。そのため授業では、既習の語彙や表現を使う活動を多くし、1人1人の発話量を増やすよう意識した。

前半は日常の身近な話題についての会話練習から始めた。自然に会話をつなぐ表現をいくつか導入しペアで練習を続けることにより、話すことに慣れさせた。適切な語彙が見つからない時は自分たちで調べたり互いに教え合ったりしており、これにより受講者同士のつながりが生まれクラス全体での自発的な発言が見られるようになった。後半はクラス全体での話し合いを中心に、前言者につなげて自分の意見を述べることを目標とした。最終週には読み物やニュースに関連した話題で適切な語彙や表現を使って議論ができるようになった。

文法は教科書の予習を前提として授業で確認、練習を行った。理解と定着に個人差があり、復習問題の間違が多い受講者には適宜個別指導を行った。助詞や動詞の活用など初級文法の間違いが残る受講者もいるが、自分で間違いに気づいたり訂正したりできるようになった。

読解は文章の構成や筆者の意図をつかむことを中心としたが、後半は音声を聞いて音読することも課した。語彙や表現を目だけでなく耳と口で覚えることが目標だったが、発音やアクセントにも注意が向けられるようになった。日本語の拍やリズム、アクセントに慣れていない受講者が多かったが、意識すれば直せるようになった。

期末発表に向け、モデルとなるプレゼンテーションをいくつか視聴し発表の形式や質疑応答の表現に慣れるようにした。最終週にはスクリプトを見ずに内容を説明したり質問に答えたりする練習をペアで行ったあとクラス全体でリハーサルを行い、不安解消につなげた。本番では皆専門家らしく堂々と発表し、他の発表者への質問も積極的に行うことができた。

待遇表現の会話は基本会話を中心に進めたが、覚えるのが難しく言い換え練習もうまくいかないことが多かった。これまでに見聞きしたことがない表現が多いことが原因だと考えられるが、オンラインによる遠隔授業のため実際に使用する場面がなく必要性を感じにくいこともあったかもしれない。動機づけのための工夫が足りなかった。

(文責：橋本佳子)

3-2 受講者によるクラス授業の評価

夏期コースでは、プログラムの最後に受講者に対しアンケートを行っている。アンケートはすべて英語で、Googleform によって行われた(参照：7章)。3-2 ではクラス授業について報告する。

クラス授業全体への評価は、excellent 92.3%、good 7.7%、fair 0%、poor 0%と高評価であった。教材への評価は excellent 92.3%、good 7.7%、fair 0%、poor 0%、教材の量については、too much 11.5%、just right 80.8%、too little 7.7%、教材の難易度に関しては、too difficult 3.8%、just right 92.3%、too easy 3.8%、宿題の質については、excellent 42.3%、good 57.7%、fair 0%、poor 0%、宿題の量については、too much 15.4%、just right 73.1%、too little 11.5%、発表会については excellent 34.6%、good 65.4%、fair 0%、poor 0%、クラスの人数に関しては、excellent 57.7%、good 38.5%、fair 3.8%、poor 0%であった。例年は4コマであるが、2020年は3コマとなりクラス授業の時間数は削減されている。受講者のコメントには、教材や宿題は良かったが、オンライン授業と時差を考慮し減らしてもよかったのではないかという意見がある一方で、受講中は宿題の多さに圧倒されたが、コースが終了してみると日本語を伸ばすには必要なものだったと思えるというコメントもある。また宿題の目的をより分かりやすく提示すれば、宿題をこなす動機になるという意見もあった。例年と異な

るコメントとしては、漢字の学習を多く組み入れてほしかったという要望があったことである。クラスの人数に関しては6人が最適だという意見がでた。

全体的に高評価であった。これはひとえに講師陣の努力と工夫によるものであろう。

4 個人授業

2020年の夏期コースは、米国東部時間帯在住の受講者にとっては3限終了が午後10時20分となり、例年のように引き続き4限のクラス授業を行うことは困難であると判断された。そこで、クラス授業開始前の7:30-8:10とクラス授業終了後の11:40-12:20の時間帯⁴に、1回40分間の個人授業を週1回、コース期間中一人あたり全6回、受講者の専門・興味を取り入れつつ必要な技能の強化を目指す内容で実施することとした。

受講者・講師の組み合わせにあたっては、事前に、受講者に対しては受講可能な時間帯の調査を、講師に対しては担当可能な人数と時間帯の調査を行った。受講者と講師の組み合わせは、クラス分け終了後、双方が実施可能な時間帯を優先し、可能な限りクラス授業を担当する講師を配置するようにも配慮した。

授業は、受講者が自身のニーズを把握し、具体的な内容を考え、講師に提案する形で、クラス授業開始と同時に始まった。表7に、授業記録に見られる実施内容を技能別にまとめた。実際の授業では、例えば論文を読む場合でも内容理解にとどまるのではなく、受講者自身がコメントを加えたり、そのコメントに対して音声面へのフィードバックが与えられたり、講師と議論するなど、一つの技能を切り口にして総合的な活動に広がるが多かった。また、ある週は待遇表現、ある週は文法の疑問点の解決というように、週によって異なるタイプの活動を幅広く行っている受講者もいた。

表7 個人授業の実施内容（授業記録より）

技能	内容
話す	待遇表現、ビジネス会話、ニュース報告、期末発表準備、クラス内ディスカッションの準備
聞く	映画、web上の講義、専門分野関連のテレビ番組
読む	ゲーム評論、小説、専門分野の論文、専門分野の雑誌記事
漢字	KIC (<i>Kanji in Context</i>)
文法	授業内容の質問、N1問題演習、論文、小説の中の文法、原稿のフィードバック

コース終了後のアンケート調査でのこの授業への評価は、excellentが69.2%、goodが23.1%であった。9件あった自由記述のコメントは全て肯定的なもので、「話す練習ができた」、「弱点を強化できた」、「クラス授業で解決できない問題が解決できた」、「週1回

ではなく週2回したかった」などであった。集中度の高いオーダーメイドの授業が、受講者にとって有意義な時間となっていたことが推察される。

(文責：千田昭予)

5 課外活動

5-1 会話パートナー

会話パートナーの活動は、授業の外で日本語話者と自由な話題で話す機会を提供する課外活動として従前より実施されている。本年は時差の問題への対応のため、実施時間を授業前の7:30-7:50、7:50-8:10と、授業後の11:40-12:00、12:00-12:20に設定した⁵。会話パートナーとして全8名(米国在住者7名、日本在住者1名、職業は社会人、主婦、学生など)の協力が得られた。会話セッションの実施状況は、表8に「パートナーが設定した予約枠数」「受講者の予約数」および「予約率」で示した。

表8 会話セッションの予約率

	予約枠数	予約数	予約率(%)
第1週	36	18	50.0
第2週	38	28	73.7
第3週	30	19	63.3
第4週	30	21	70.0
第5週	14	13	92.9
第6週	34	19	55.9
全期間	182	108	59.3

この活動への学生の参加は任意であるが、担任が必要であるとする受講者(本年は11名)には強く勧めて参加させた。本年は予約方法が全てインターネット上のシステムを使うもので混乱が予想されたため、コース前半は彼らの会話セッションの予約を講師が代行したが、第5、6週は全員が自分で予約・参加した。

全期間を通じての予約率が59.3%とやや低いのは、時間忘れなどのミスやネット回線の不調など技術的な問題で成立しなかった事例が全期間通して9件あったこと、月曜(アメリカは日曜)は受講者の出足が鈍かったこと、一度も参加しなかった受講者が5名いたことなどが影響していると考えられる。毎週掲示板で参加を呼びかけたり、週の半ばから複数回の参加を認めたりしたが、それでも毎週多くの枠が埋まらないままであった。せっかくの予約枠を無駄にしないためにも、今後はもう少し会話セッションの数を限定したほうがよいかもわからない。

コース終了時のアンケートには、個人名を挙げての賛辞や、いろいろな人と話せたことの喜び、今後も交流を続けたいなど、肯定的なコメントが述べられている。一方で、課外活動全般に対して、時差のため授業外活動は負担が重く参加できなかったというコメントも散見された。日本語話者と話す機会は、受講者にとって社会文化的な学習リソースとなるが、本年のように日本滞在がかなわなかった場合はなおさら貴重である。今後も受講者の負担感を考慮しつつ充実させることが必要であろう。

(文責：千田昭予)

5-2 交流の場

交流の場として Remo にて自由会話の場を設け、Zoom にてワークショップを行った。Remo の自由会話の場とワークショップは自由参加である。

Remo とは、リモート会議からプレゼンテーション、仕事の合間の雑談・リモート飲み会まで手軽に実現できる Web 会議システムである（企業 LOG より）。Remo は授業前の 7:30-8:25、授業後の 11:15-12:40 に設定した。夏期コース期間中の Remo には 19-20 年度の年間コースの卒業生の参加も許されていた。授業開始から 2 日間の Remo の利用者が少なかつたため、2 週間に 1 度（計 3 回）、一人当たり 10 分程度の「Remo 会話」を主任が行うことにした。目的は Remo に参加させることであり、主任との Remo 会話は半強制的な活動とした。Remo 会話①では夏期コースや時差に対応できているかについて、Remo②では個人授業について、Remo③では期末発表会について中心に話した。Remo 会話の前後に時間のある受講者は、Remo に参加中の他の受講生や卒業生、講師と自由会話を行っていた。

ワークショップとして、ラジオ体操（8 回）、レシピ交換会（3 回）、マインドフルネス講座（2 回）を行った。ラジオ体操は年間コースの講師が、レシピ交換会とマインドフルネス講座は 19-20 年度の年間コースの卒業生が主催者となった。現役生と卒業生との交流の場が設けられたという点は、2020 年の夏期コースの特徴である。

5-3 受講者による課外活動の評価

5-3 では 5-1 以外の課外活動の評価のアンケート結果を記載する。Remo で受講者と話したかは yes 46.2%、no 53.8%、ラジオ体操やレシピ交換会、マインドフルネス講座などのワークショップに参加したかについては、yes 23.1%、no 76.9%であった。ワークショップは Zoom で行われた。参加した受講者は少数ではあるが満足していた。2020 年は校外学習がなかったため、文化的な活動を体験することができなかったという受講者のコメントがあった。オンラインであっても、ワークショップなどで文化的な活動を取り入れるべきだったであろう。

6 オンライン授業の問題点と工夫

2020年はオンライン授業であったため、「オンライン授業で役に立ちそうなこと」と題し、オンライン授業に関する情報交換を Google ドキュメントで行った。夏期コースの担任会議にて直接情報交換を行う必要性が挙げられ、オンライン授業・情報交換会（以下、情報交換会）が行われることになった。

6-1 講師によるオンライン授業のアンケート結果

情報交換会に先立ち、夏期コースの講師 10 名と参加を希望する年間コースの講師にアンケートを行った。夏期コースの講師に対する質問項目は担任会議で話題に上ったことを中心に、①対面式と異なること、②対面式とあまり変わらないこと、③オンライン特有の問題、④クラスノートをどのように提示していたか、⑤読解の教材をどのように提示していたか、⑥「オンライン授業で役に立ちそうなこと」に書かれていることで良かったこと、⑦実際にやってみて失敗したこと、⑧今後オンラインでやってみたいこと、⑨お勧めのアプリなど、の9項目である。年間コースの講師に対する質問項目は、情報交換会で話したい内容、お勧めのアプリについてである。

夏期コースの講師が問題である、やりにくいと感じたことは、受講者の雰囲気や性格を把握しにくい、授業中の様子が見えにくい、反応が遅い、アイコンタクトがしにくい、会話に時差がある、グループワークがしにくい、コピーペーストの疑いがあるものが予想より多い、机間巡視ができない、メモの取り方やノート、教材の使い方など受講生の動きを把握しにくい、クラス運営が難しい、受講者同士が交流しにくいなどである。一方で、話す受講者はいつも話すため発話量に変化はない、受講者が仲良くなるには時間がかかるが仲良くなる、受講者の熱意は変わらないなどの意見もあった。

プログラム全体を通しての工夫には、便利なツールの情報共有（参照：資料2）、受講者のタイムゾーンの視覚化、クラス交流の増加、講師の勉強会の開催、受講者の紹介ビデオの作成、交流のための全受講者参加のイベントの開催、強制的な交流の場を設けるべきだなどの意見があった。

夏期コース、年間コースを問わず講師の多くが興味を示したのは、オンラインのみの環境ではどのようにクラスの中での関係性が構築されていくのか、発言のコントロールにはどのような問題が生じるか、授業中のクラスノートや資料の提示の仕方であった。

6-2 オンライン授業・情報交換会

2020年8月4日（火）12時半~14時に Zoom にて情報交換会を行った。参加者は夏期コースの講師5名と年間コースの講師7名である。情報交換会のテーマは6-1のアンケート結果を参考に、クラス・コミュニケーション、クラスノートの2つとした。前半は夏期コ

ースの講師3名が話題提供を行い、後半は話題提供を基に情報交換が行われた。講師3名の話題提供は、川西由美子「関係性構築と発言のコントロール」、後藤恵利「夏草の授業ノートから見えたこと」、高橋佳奈子「クラスノートの活用法を中心に」であった。参加者からは、参考になった、年間コースでも情報交換の場があれば良いなどの声があった。

7 受講者による評価

2020年の夏期コースプログラムに関するアンケートは、8月4日(火)15時送信、8月5日(水)13時締め切り、Googleformによって行われ、92.9%(26/28名)の回答を得た。質問は英語で行われた。質問の大項目は、A.プログラムの全体評価、B.オンライン授業、C.クラス授業、D.課外活動、E.教職員、F.奨学金である。Cのクラス授業については3章に、個人授業については4章に、Dの課外活動については5章に記述済みである。本稿では紙幅の都合により、一部を報告するにとどめる。

プログラム全体への評価はexcellentが92.3%(24名)、goodが7.7%(2名)、fair0%、poor0%と高評価であった。受講者は大学院で既にオンライン授業を経験しており、他の機関と比較をしたコトが多い。プログラム構成に関しては、コースが組織化されていたことへの評価、1クラス6名以下という少人数制への評価、個人授業の設定への評価、受講者がオンラインで予測していた問題がほぼなかったことへの評価があった。これは、他の受講者にIUCの夏期コースを推薦するかという問いに対し、100%の受講者が「はい」と回答したことにもつながるだろう。

オンライン授業への評価は、excellent50%、good50%、fair0%、poor0%であった。対面授業との比較については、far inferior7.7%、somewhat inferior34.6%、roughly comparable, with some merits and some demerits57.7%、slightly superior0%、far superior0%、授業中の議論に関しては、better than expected53.8%、roughly as expected46.2%、worse than expected0%、教材を印刷したかについては、yes69.2%、no30.8%であった。

授業に関連する評価として、Google Driveの使用については、excellent61.5%、good30.8%、fair7.7%、poor0%、受講前の宿題については、excellent26.9%、good69.3%、fair3.8%、poor0%、日本語以外は話してはいけないという規則を守ったかについては、yes92.3%、no7.7%であった。授業中に日本語で表現できないときは英語を使用したいという受講者からのコメントがあった。

所長をはじめとした教職員に対するコメントは温かいもの、感謝を述べるものであった。オンラインプログラム移行へのねぎらいや開催への感謝などがあったのは、2020年の特徴と言えるだろう。

コース中、ストレスを感じたりうつ状態に陥ったりしたかについては、yes65.4%、no34.6%であった。「はい」と答えた受講者のコメントとして最も多いのは、時差の問題であ

る。また、2020年の夏期コース中には、新型コロナウイルスによるパンデミックや、アメリカの留学生に対するビザの規定の変更のニュースなどがあり、例年とは異なるストレスも抱えていたようである。しかしながらこのような状況下で皆勤賞が64.3%（18/28名）、遅刻1回の精勤賞と合わせれば75.0%（21/28名）と、例年になく出席率が高いのは受講者の熱意の表れである。来年度以降の受講者に対するアドバイスとしては、健康が第一、リラックスをすること、ストレス解消をすること、自分のペースを守ること、休憩時間を必ず取ること、軽い運動をすること、課題に対する重圧を感じすぎないこと、目的は自身の日本語力の向上にあることを認識することなどの回答を得た。

2020年の夏期コースに対する高評価は、講師陣の努力と気遣い、オンラインでも日本語力を伸ばしたいと考える受講者の熱意によるものだと考える。

8 おわりに

2020年の夏期コースは、オンライン授業となった。オリンピック対応からオンラインへの移行となり、さまざまな話し合いが行われた。一時は開催も危ぶまれ、受講者が集まるのかなどの不安要素も多々あったが、最終的に28名の修了者と10名の講師を迎え、成功裏に終わられたことはひとえに受講者と講師の熱意の賜物であろう。

2018-19年度の夏期コースより、主任・副主任が1年交代制になった。これに伴い3年かけて主任・副主任の業務のマニュアル化を進めてきた。2019-2020年度にてマニュアルの完成を見る予定であったが、オンライン化の対応によりいくつかの点を残すこととなった。2020-2021年度もオリンピック開催への対応を迫られることになるが、引き続き職務の簡素化とマニュアルの更新を行い、主任・副主任とスタンフォードオフィス及び横浜オフィスの連携体制構築をさらに進める必要がある。

(ゆうき さおり / 2019-2020年度夏期コース主任)

基本教材

- アカデミック・ジャパニーズ編著 (2001) 『留学生の日本語 読解編』 アルク
 日本研究センター 『待遇表現』
 日本研究センター 『サマープログラム文法ノート』
 庵功雄他 (2019) 『日本語文法演習 上級』 スリーエーネットワーク
 川端祐一郎他著 (2019) 『上級日本語教材 日本がわかる、日本語がわかる ベストセラーの書評エッセイ 24』 凡人社
 許明子・宮崎恵子 (2013) 『レベルアップ日本語文法 中級』 くろしお出版
 近藤安月子他著 (2005) 上級日本語教科書『文化へのまなざし』 東京大学 AIKOM 日本語

プログラム

友松悦子・和栗雅子著 (2004)『初級日本語文法総まとめポイント 20』スリーエーネットワーク

平井悦子・三輪さち子著 (2009)『中級を学ぼう』スリーエーネットワーク

目黒真実 (2010)『上級学習者のための日本語読解ワークブック』アルク

注

- 1 家庭の事情による退学者 1 名。
- 2 夏期コースは基本的に年間コースで行われたオンライン授業を踏襲している。IUC でのオンライン授業については、佐藤他 (2020) を参照されたい。
- 3 2020 年はクラス授業が例年より 1 コマ減少したため、FLAS が要求するコンタクトアワーを満たすことができなかった。このため、FLAS の受講者向けに夏期コース終了後の 8 月 6 日から 14 日にかけて、特別にコンタクトアワーの不足分を補うための追加コースを行った。
- 4 ただし他に受講者と講師にとって都合のつく時間があれば、これ以外の時間にも実施した。
- 5 個人授業同様、この時間帯以外にも受講者と会話パートナーの生活時間帯に実施した。
- 6 2020 年は受講者の写真と日本語の自己紹介文を講師と受講生に公開した。講師からは受講者の状況を把握するのに非常に有益だったとの声があった。

参考文献

大橋真貴子 (2019) 「2019 年度夏期コース報告」日本研究センター教育研究年報 第 8 号 pp.173-185

< http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2019_Ohashi.pdf >

起業 LOG 「Remo」 <<https://kigyolog.com/tool.php?id=1249>> (2020.8.14 閲覧)

佐藤有理・佐藤つかさ・小峰克之・秋澤委太郎・結城佐織・青木惣一・大橋真貴子・橋本佳子・千田昭予 (2020) 「遠隔教育による上級日本語教育実践報告—ICT を活用したオンライン授業移行への対応と課題—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第 9 号 pp. 1-21

< https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020_SatoAri_et_al.pdf >

Remo <<https://remo.co/>> (2020.8.5 閲覧)

Zoom ミーティング <<https://zoom.us/jp-jp/meetings.html>> (2020.8.5 閲覧)

資料1 IUC ONLINE SUMMER PROGRAM 2020 COURSE OUTLINE

Regular Group Lessons

The summer group will be divided into three classes. Each class will convene for three 50-minute sessions held Monday–Friday 08:30–11:20 am Japan standard time and taught via online videoconference (see schedule below). Classes will be recorded and made available online for participants to review.

Time Zone	Group Lesson Schedule (3 x 50-min. session daily, Monday–Friday)		
	Session 1	Session 2	Session 3
Japan	8:30–9:20	9:30–10:20	10:30–11:20
Pacific	16:30–17:20	17:30–18:20	18:30–19:20
Eastern	19:30–20:20	20:30–21:20	21:30–22:20

Individual Lessons

Individual lessons will be 40 minutes long and held once a week in time slots immediately before or after scheduled group classes or at a separate time to be decided between the teacher and student (see schedule below). Individual lessons will be recorded and made available online for the participant to review.

Time Zone	Individual Lesson Schedule (1 x 40-min. session per week per student)		
	Slot 1 (before classes)	Slot 2 (after classes)	Other times
Japan	7:30–8:10	11:40–12:20	To be determined between student and teacher
Pacific	15:30–16:10	19:40–20:20	
Eastern	18:30–19:10	22:40–23:20	

Sessions with Conversation Partners:

Sessions with conversation partners will be 20 minutes long and held once a week, generally held before or after regular classes at a time convenient for both the student and conversation partner. Participation is voluntary.

Time Zone	Sessions with conversation partners Schedule (1 x 20-min. session per week per student/voluntary)		
	Slots 1 & 2 (before classes)	Slots 3 & 4 (after classes)	Other times
Japan	7:30–7:50, 7:50–8:10	11:40–12:00, 12:00–12:20	To be determined between student and partner
Pacific	15:30–15:50, 15:50–16:10	19:40–20:00, 20:00–20:20	
Eastern	18:30–18:50, 18:50–19:10	22:40–23:00, 23:00–23:20	

資料2 「オンライン授業に役立ちそうなこと」

【アプリなど】

- ・ Google Jamboard : クラウド型デジタルホワイトボード

<https://www.youtube.com/watch?v=qO4BXTnAARQ&feature=youtu.be>

- ・ Seesaw : 授業向け Instagram

<https://youtu.be/wFBwSLHh98>

- ・ Edmodo

<https://www.youtube.com/watch?v=OMZeFgnr7qU&feature=youtu.be>

- ・ Microsoft Whiteboard

<https://www.microsoft.com/ja-jp/microsoft-365/microsoft-whiteboard/digital-whiteboard-app>

- ・ miro

<https://miro.com/>

- ・ mmhmm

<https://www.mmhmm.app>

【教材など】

- ・ Kakimashou - Let's Practice Writing Japanese!

<https://www.kakimashou.com/>

- ・ 小学校で学習する文字の PowerPoint スライド | マイクロソフト アクセシビリティ

<https://www.microsoft.com/ja-jp/enable/ppt/moji.aspx>

- ・ KOTONOHA 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」 少納言

<https://shonagon.ninjal.ac.jp/>

- ・ 用例.jp - 世界最大の日本語用例検索エンジン

<http://yourei.jp/?hl=ja>

- ・ 違いがわかる事典 | 違い・使い分け・見分け方がわかる違いの総合事典

<https://chigai-allguide.com/>

- ・ 日本語教育コンテンツ共有システム

<http://www.nihongo-ews.jp/>

- ・ 生活場面切り取り動画 (Movie) ・ 付属紙教材 (Teaching materials)

<http://support21.or.jp/ouractivities/learning-program/japanese-learning-materials/movie/>

- ・ まるごと+ 日本のことばと文化 初級2 (A2)

<https://a2-2.marugotoweb.jp/ja/>

- ・ MARUGOTO Plus Global Home

<https://marugotoweb.jp/ja/index.php>

・いろどり 生活の日本語: TOP

<https://www.irodori.jpf.go.jp/>

*資料2におけるすべてのアクセス日時は、2020年8月5日である。

*資料2は「オンライン授業に役立ちそうなこと」の一部抜粋である。